

タイトル：2025年度 教育セミナー（第21回）

日時：2025年9月18日（木）～21日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「アーティスティックスイミングからアラブ文学・アラビア語教育研究へ」

鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学教授・慶應義塾大学シェイハ・ファーティマ・アラビックラーニングセンター特任教授）

本講義では、発表者自身の関心の展開を、アーティスティックスイミングからアラブ文学、さらにはアラビア語教育研究へと至る道のりを軸に紹介した。出発点となったのは25歳の頃、レバノン出身の詩人・画家カール・ジブランの代表作『預言者』との偶然の出会いである。当時、シンクロナイズドスイミングのコーチとして活動していた発表者は、進路に迷うなかでこの作品に触れ、中東やアラブ文化への関心を深めた。これを契機にアラビア語を学び、さらに米国大学院で中東研究やアラブ文学を専攻することとなった。博士論文では古典アラブ詩、とりわけ詩における「描写（ワスフ）」の機能に注目し、詩と絵画・音楽・建築といった他の芸術領域との関係を「インターアーツ理論」によって分析した。これにより、従来は「描写的であるがゆえに文学的価値に乏しい」とされたアラブ古典詩に新たな評価軸を提示し、文学としての意義を再考する視点を示した。

また、研究対象はアラブ古典詩にとどまらず、『千一夜物語』やマグリブに伝承された『百一夜物語』へと広がった。写本研究や物語構造の分析を通じ、アラビア語写本の特質や伝承の多様性に光を当て、物語世界の身体・声・視線の表現がテキストと挿絵の相互作用のなかでいかに構築されるかを探究している。こうした営みは、アラブ文学研究においてテキストと周辺文化との関わりを立体的に理解する試みである。

さらに、米国留学中の教育実践をきっかけに、アラビア語教育研究にも関心を広げた。学習者の動機付けとコミュニケーションや文法との関連を分析する研究を進めてきた。日本におけるアラビア語教育は制度的にも歴史的にも特殊な位置を占めており、2025年には公教育導入から100周年を迎えた。この節目にあたり、学習者の実態調査や教材開発を通じて教育方法論の刷新を図ることは、今後ますます重要な課題となる。

最後に、発表者自身のもう一つの専門領域であるアーティスティックスイミングに、立ち戻ろうとしていることにも触れておきたい。この分野では、身体表現を一つの「物語」として捉え、人間にとって身体がいかに言語的な意味を帯び、芸術的な世界を形づくるのかを探っている。この問いは、文学研究における「描写」というテーマにも通じるものであり、身体性と象徴性を軸に、芸術表現を横断的に考察するための重要な基盤となっている。

本講義を通じて伝えたかったのは、一見まったく異なるように見える領域——スポーツ芸術、アラブ文学、そしてアラビア語教育——が、実はどれも「人が自らを表現し、物語を紡ぐ」営みとして深く結びついているということである。自らの経験や関心から始まった研究の道は、いつのまにか分野を越えて広がり、文学研究や教育実践、さらには身体表現の探求をつなぐ視点を育ててくれたように思う。今回のセミナーでは、これまでの歩みを振り返ると同時に、そのプロセスを受講生の皆さんと分かち合うことができたことに、心からの喜びを感じている。貴重な機会を与えてくださったことに、深く感謝申し上げたい。